

レーザーコンパス

プロとアマ

宮島 龍 興*

Tatsuoki MIYAJIMA*

1. 職業人と専門家

プロとはプロフェッショナルの略であり、アマとはアマチュアの略である。字引をひいてみると、

プロフェッショナル：1. 知的職業人，技術専門家，2. 専門家，くろうと，3. 職業選手，プロ。

アマチュア：1. しろうと，愛好家とある。本来はプロとは聖職者，法律家，医者の意味したそうであるが，いまでは職業人や専門家をいうものようである。

オリンピックでプロとアマの論議がさかんであるが，プロを職業人と考えると，それによって生活をたてていけばプロと言ってよいであろう。プロ野球，プロゴルフなどでは意味が，かなり明瞭である。

大学の先生はプロフェッサーであるから，これは職業人のはずである。もっとも，ブラジルに行ったとき，プロフェッソールといわれる人が多いので，よく聞いてみたら小学校でも，プロフェッソールであった。

もしプロを専門家と考えると，プロとアマの専門家としての相違が問題となる。ゴルフのようにハンデのきめられるスポーツでは，職業としているかどうかとは別に，その技術の程度を言うことができるから，専門家と非専門家との質的区別をハンデによって表わすことができる。芸術家とか，学者研究者になると，質的なちがいを量だけで表わすことができないうが，比較に

ならぬ程すぐれていないと，プロといえない。

マスコミでもてはやされる芸術家や学者が，専門家の集団や，専門の学界では大して評価されないことがよくある。学界などではたえず競争し合っているから，多くの場合，互の評価は大へんきびしいものであり，少くとも一芸では世界的レベルでなければ専門家とはいわれない。

時には，時代にあまり先行するアイデアが，学界に理解されない例はないわけではない。しかしこれからはアイデア，ソフトウェアの時代になり，変化の速度はますます大きくなるであろう。時代にとり残されないようにしなくては明日は専門家ではなくなる。

このように，プロの二つの意味，職業人と専門家，は必ずしも一致するものではないが，学者，研究者などで，研究を職業としている場合には，同時に仕事としての学問，研究の上でも専門家であってほしいと思う。それが学者，研究者としての良心である。

専門家同志の評価はきびしく，客観性の高いものであるが，一つの領域での専門家が必ずしもほかの領域では専門家でないことも多い。ある領域での専門性について自信をもつことは研究者として当然のことであるが，他の領域ではアマであることを自覚するのが本当の研究者である。

2. プロのリーダー

外国には大規模の研究施設の建設の管理を専門とする人がいる。大きな陽子加速器の建設か

*理化学研究所理事長（〒351 和光市広沢2-1）

*Chairman, The Institute of Physical and Chemical Research (RIKEN), Hirosawa 2-1, Wako-shi, Saitama 351)

ら、大きな核融合装置へと仕事を移して行く。そうかと思うと、マンハッタン計画のオープンハイマーのように、学者であったのに、大きな事業をまかされて、うまくこなす人もいる。

それほど大きいことでなくても、大学の教室主任、あるいは学長なども、必ずしも学者としてだけすぐれていればよいというのではなく、管理能力も重要である。

こんなことは、当然で、何を今更いうのかと思う人も多いだろう。しかし実際にはこのような簡単なことが案外理解されない。たとえば、科学の研究が進んで行くと、だんだんと施設の規模が大きくなって行くし、人の数も多くなって行く。そうすると、ある規模から質的な変化が起り、“個人商店”から“株式会社”へと変身する。それに伴って、研究のリーダーから、研究“事業”のリーダーへと変化する必要がある。その際、研究リーダーであった人が、研究事業のリーダーとしての能力も合せ持っていれば幸であるが、これは必ずしもいつもそうとは限らない。

大学の場合にも、国立大学のように学長が同時に管理者でもあるときに、すぐれた学者というだけで選んだりすると、紛争の処理のようなときには、大変困った事になってしまう。学長のほかに管理能力のある理事会がある場合には、理事会の管理能力を十分発揮できる人をえらぶ

ことができれば、それも一つの行き方であろう。

大学や研究所の管理者を、外部からもつてくることもないわけではない。外国では殊にその例が多いようである。しかし、これはよほどよい人をえらばないと、うまくいかない。営利会社のように、ある物指で管理能力のいくつかが測られる場合には、適任の人を選ぶ基準があるが、大学や研究所のように、成果が量的に表わしにくい場合には、人をえらぶのがむずかしい。産業界でうまくやった人、行政府で実績のある人などが“天下り”をしても、必ずしもうまくいくものではない。それだからと言って、内部の学者、研究者の中から選挙のような方法で選出した“天入り”の人でうまくいくとも限らない。

リーダーにプロというものが存在するものであろうか。もし専門としての管理法があるものならば、オーケストラの指揮者のように、ある程度は養成することもできるかも知れない。小さくは研究、教育機関の管理から、大きくは自治体や国の行政の管理など、どのような管理能力が必要か、どのようにして適切な管理者、指導者を育てるか、どのようにして選び出すか、もっと真剣に考える必要があるのではなからうか。殊に激動する現代では、明日のリーダーをどうして育て、発見するかが物事の成否を決定する大きな要因である。